

【研究実践校 全体授業研究会（高学年）】

参加者：就将小職員 米子市7名

指導助言：愛媛大学 日野 克博 教授



○協議の柱

活動の中で、協働的な学びが達成されていたか。
運動の特質を生かした学びになっていたか。

○成果

- ・類似の運動（アナログン）により、明確な課題を見出すことによって、運動が苦手な児童も意欲的に取り組む姿があった。
- ・グループで役割分担をし、ローテーションを組んで行うなど子どもたち同士が積極的に関わっている姿が多く見られた。
- ・自分や友だちが跳んでいる姿を見ながら話し合う姿から、chromebookの活用の仕方がわかった。

○課題

- ・話し合いを自分達の課題に繋げるためのよい方法はないか。

⇒班によって進度や深まりが違う。授業者（T1, T2）が役割分担を明確にしながら、見取り、声かけをしていく。

⇒chromebookの活用場面は、焦点化、可視化、共有化の3点

※動画では見えるものと見えないものがある。 Ex. 胸につける, ギュッとする, 大きく回す
見える 見えない

- ・本時は1回目の活動の後、ポイントを示された。先に示すことで、練習が2度でき、課題も見つけ出しやすかったのではないか。

（授業者）前時では先にポイントを示し、2回の練習の中で課題を見出す子どもの姿があった。本時は、1回目の活動での困り感をもとに、示したポイントで自ら課題を見出してほしいと考えた。ただ、3つのポイントを示したので多かったように感じる。

⇒課題とは、何に対して子どもの思考・判断を活性化させたいか。もう少し絞ってもよい。

⇒今回の単元計画では、課題を1時間ずつ分けて取り組む形であったが、前時までで学んだことをたし算しながら取り組む方法もある。走り高跳びについては、助走・踏み切りの動きも重要。空間動作を意識しすぎて上手く着地できない様子もあった。

- ・走り高跳びの特性とは。また、評価をどのように行うか。

⇒体育学習は競技の選手を育てるわけではない。走り高跳びを用いて、子ども達に運動の楽しさを伝え、学ばせることを意識したい。

⇒評価については、競技ではないので記録ではなく、課題に対して指導をしたことの実現状況を評価すべきである。